研究ノート

宝塚と日本近代の遊園地

安野 彰（住居デザイン研究室）

宝塚音楽歌劇学校新館・ダンス大教室『宝塚新温泉遊覧アルバム』（大正15年）より

はじめに

2014年は、宝塚歌劇が誕生して100周年にあたる。大正3年、遊園地・宝塚新温泉の余興として始まった少女だけの劇団は、本拠宝塚と東京にある専用劇場で多くの観客を惹きつけ、卒業生達は、この国の芸能界において一定の地位を確保し続けている。しかし一方で、宝塚と言えば、特異なファンに支持されるという偏ったイメージによって、その価値が正当に理解されていないようにも思える。私も自身の研究において宝塚が非常に重要な位置を占めることを理解するまでは、無知に等しく、観劇の経験も無かったが、歴史と実像を知るにつれ、これが日本独自の近現代文化の形成に大きく寄与し、様々なコンテンツのルーツに位置づけ得ると考えるようになった。観劇を通じて感じられる時間と空間は、大正以降に進化を遂げた我が国の大衆文化の本流と歩みを共にしてきた質を有している。筆者の専門は、建築史や都市史といった分野であるから、そうした理解も部分的でしかないが、それでも、歌劇をとりまく「宝塚文化」が、少なくとも身近にあるメディアや環境の形成に深く関わりを持っていることを確信できる。手塚治虫が宝塚からインスピレーションを得ていること、近年のアイドルグループが明らかに宝塚歌劇と相似のシステムやイメージ戦略を用いていることなど、例は幾つも挙げられるが、それは、宝塚歌劇が使用する施設やそれが立地した土地と場所のあり方などにまで拡げることができる。

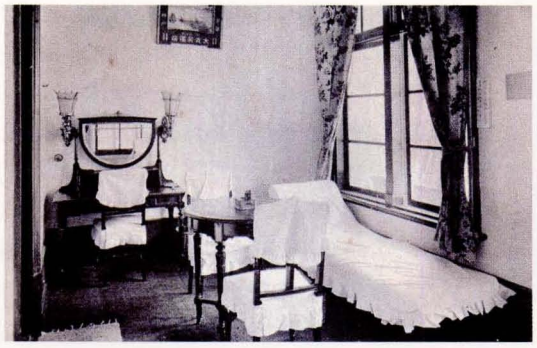
私が大学院生の時分から細々と続けている研究は、明治以降に登場した近代遊園地の成り立ちを明らかにしようとするものである。遊園地という場所を、その時代の都市のありようが箱庭的に凝縮された空間と捉え、それが具体的にどう変化したかを明らかにしてきた。その過程で、東京よりも産業や都市の近代化がいち早く進む大阪近郊の事例が注目され、なかでも宝塚少女歌劇の公演場「宝塚新温泉」が、革新的な役割を果たし、東京やその他の地域でのモデルにされていた様子が見えてきた。遊園地と

いう娯楽施設も、宝塚と関わりの深い大衆文化のひとつなのである。

少女歌劇の立ち位置と娯楽場の健全化

大正初頭、都市娯楽は、未だ成人男性が主体であった。そのための施設は、たとえば遊廓や花街という形で存在した。また、演芸場や映画館が立地する娯楽街も、それほど治安や風紀の良い場所ではなかった。そうした中で、女性や子供でも主体的に都市娯楽を享受するあり方を積極的に示そうとしたのが宝塚であった。しかし、創始者の小林一三は、それを初めから目指したのではなく、次第に可能性を理解していったと思われる。

小林は、大阪の梅田から兵庫の宝塚に箕面有馬電気軌道（現阪急電鉄宝塚線）を敷設して、沿線の開発に乗り出すが、終端の宝塚に遊園地「宝塚新温泉」を開設することで乗客の増加を当て込んだ。少女だけによる歌劇はその余興として創始するのだが、対岸には温泉街と花街が存在しており、小林は当初、彼らに共同による振興を働きかけていたのである。権利関係の調整が拗れて交渉は不調に終わるが、これが新温泉経営の方向性に少なからず影響を与えた。すなわち、小林は漸次、旧温泉と一線を画すという態度を取るようになる。



宝塚新温泉 家族風呂化粧休憩室（絵葉書）

昭和初期の宝塚新温泉（絵葉書）

現在の武庫川と宝塚大劇場

少女歌劇のルーツは、三越の少年音楽隊、白木屋の少女音楽隊など複数のいわれがあるが、いずれにせよ、少年少女は、性的魅力を抑制した存在であり、また、少女のみにすることで、生々しい男女関係を封印しつつ、可愛らしさという別種の魅力が引き出される。小林は、取りあえず始めた少女歌劇を、将来的には本格的な男女の演劇に育てる志向を持ちつつも、男性加入の是非を問われる局面になると、少女だけで醸し出される魅力を重視し、終に男性の加入を認めなかった。

男性加入を認めないのには、宝塚のファン達が、その独自の魅力を早くから支持していたことも考慮されているが、娯楽や娯楽場に対する世間のイメージも少なからず関係していたと考えられる。研究では、そうした観点などを踏まえ、当時の宝塚の置かれた状況を分析し、その変化を丁寧に追った。大正初期、花街を控えた温泉地の劇場で演じられる少女だけの劇団は、公演を見ずに穿って考える人士にとっては、芸妓と近しいものと映っただろう。芸妓は

本来、芸事で客をもてなすが、その当時、客との同衾もそれほど珍しくはない。加えて、女優という職業自体、良い印象は持たれない時代であり、歌劇生徒達のスキャンダル報道も少なくなかったのである。

新種の興行が正当に受容されるには、本質的な魅力を高めるとともに、新たなイメージを明示する必要があったのだろう。そのために、小林は、興行場である宝塚新温泉という遊園地全体を清新な空間にして、対岸の温泉街とは徹底的な差別化を図る。例えば、モダンで明るい建築を使い、音楽学校を園内に移設して学園のイメージを娯楽場に重ね合わせるなどの工夫がされた。主要顧客も、「女性と子供」を前面に喧伝された。すなわち、宝塚という場所を通じて、健全な娯楽のありようが都市空間として表現されたのであった。「清く正しく美しく」という言葉が掲げられたのは、意識を共有して娯楽の質をそうした方向へ導く必要性があったことの裏返しとも読める。当時の少女歌劇が置かれた状況が、都市環境のあり方に反映されていたとも言える。

大正から昭和初頭にかけて完成されていった宝塚的なるものは、全国にも普及していく。まず、東京に少女歌劇が進出し、全国に幾つもの宝塚劇場が建設される。宝塚を模した遊園地や少女歌劇も各地にできるのである。東京では、多摩川園、鶴見花月園、京王閣などの遊園地が良い例である。宝塚をはじめとする大都市郊外の遊園地は、家族連れ、女性と子供を中心とした利用者像を喧伝し、近代の家庭生活のあり方を示す施設でもあった。当時の資料を見るにつけ、TAKARAZUKAは、今以上にメジャーで、一般社会に近しい存在であったことに気づかされる。

本研究所の助成研究では、そうした宝塚モデルが、本家とは別の場所でどのように展開されていたかを課題に、東京の多摩川園や岩手の花巻温泉といった施設を取り上げた。

宝塚新温泉内にあった旧宝塚公会堂（前宝塚音楽学校）

もうひとつの東京宝塚

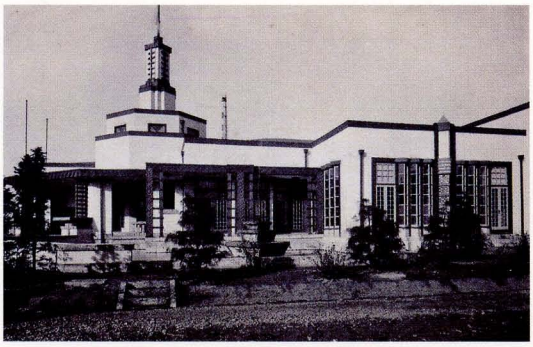
昭和9年、日比谷の帝国ホテル前に、東京宝塚劇場が開場する。宝塚が東京へ進出する大きな一歩となるが、これより前、宝塚少女歌劇は、大正7年から帝劇や新橋演舞場での公演が続けられており、東京でも早くから認知されていた。東京では、他にも小林や現阪急が主導した一方で、別の主体が宝塚を模した施設もあった。

その一例として着目できるのが、田園調布の多摩川園である。ここに、もうひとつの東京宝塚が試みられていた。今は田園調布と呼ばれる多摩川台は、渋沢栄一による田園都市構想によって大正末に開発され、先進的な郊外生活が展開された場所であった。

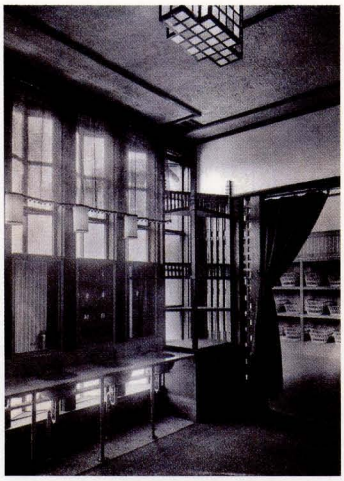
事業は、鉄道沿線の郊外開発を関西でいち早く展開していた小林一三に指導を請うことで実現に至っており、彼の手法が少なからず反映されていた。すなわち、多摩川台での郊外生活は阪急沿線のそれと、多摩川園は宝塚新温泉と対応する。

とはいえ、多摩川園の設備や催事の内容については、あまり知られていなかった。開設以降の様子は尚更である。こうした基本的な事柄を、雑多な情報からでも、明らかにすることが必要なのである。遊園地事業は本業ではないので、企業の記録には残りにくい。比較的情報のある宝塚新温泉ですら、歌劇関連の資料に紛れた断片が他に比較して多いに過ぎない。そこで、新聞記事など雑資料などを用いることになる。

多摩川園の設備には、大浴場と劇場が存在し、飛行塔が設けられていた。宝塚新温泉と同様の構成である。偶然かもしれないが、川縁の立地で、分岐する



多摩川園の浴場施設「夢のお城」（『建築写真類聚』より）



「夢のお城」の脱衣室（『建築写真類聚』より）

田園調布駅舎（復元）　田園調布の住宅地も多摩川園も田園都市事業の一環として開発された。

路線が高架で敷地を跨ぐ様まで同様である。気になるのが、劇場の催しだが、そこでは当初、帝劇女優による劇団による公演が行われていたことが、記事や広告から読み取れる。劇団名は、劇場名と同じ「ことり座」であったようだ。詳細は不明だが、少女歌劇を意識したものだろう。

しかし、昭和10年秋からは、菊人形や躑躅人形に代表される読売新聞主催のイベント会場としての性格が強まり、日中戦争以降は戦時イベントが盛んになる。浴場、演劇、乗り物などを主とした日常の清遊地という当初の遊園地のあり方は幾分変質し、目論見られた宝塚らしさやモダンな遊び場としてのイメージは相対的に減退していったように見える。

小近代都市としての温泉リゾート

宝塚のモデルは、別府の鶴見園が温泉と少女歌劇を看板にしていたように、地方のリゾートにも浸透していた。当初は花巻温泉遊園地として開発された岩手の花巻温泉も、そうした例のひとつと言われる。貸別荘や様々な新しい娯楽施設が整備され、宝塚新温泉を彷彿とさせる外観が整えられていたためであろう。

リーフレットに描かれる絵図を追うと、最初期の計画は、別荘を主とした温泉リゾートだったようだが、それを方向転換して娯楽施設や設備を増やした結果、遊園地化していったことが分かる。このとき宝塚新温泉が参照されたかは不明だが、当初計画されていた分譲別荘が貸別荘に代わりつつも、山間の小近代都市の様相を呈したのである。

一企業体として経営された同温泉では、「花巻温泉ニュース」という広報が発行されたが、その写しの一部が残されている。ここでも、新聞記事が重要な情報源のひとつとなった。

花巻温泉は大正14年に開設されるが、新聞は昭和4年からの発行である。初期の様子は不明なものの、紙面では、女性や子供、家族向けといった文言は少なく、団体や男性客を対象とした記述が多い。これを見る限り、花巻温泉は、この地方の社交・福利施設といった性格が強かったと捉えられ、宝塚新温泉や多摩川園とは幾分異なる性格を持っていた。

最大の違いは宝塚新温泉が距離を取った置屋や

『花巻温泉遊園地図絵』（部分）

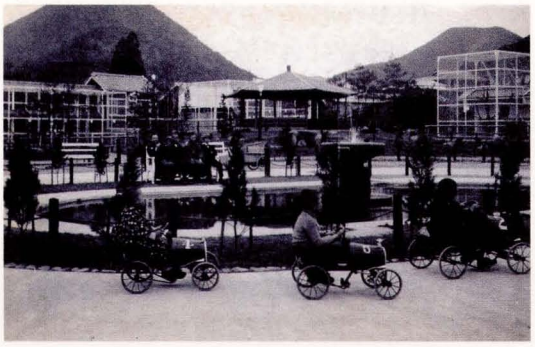
料亭があることで、紙上ではその性的魅力やサービスに関する記述も目立つ。芸妓たちは、旅館や貸別荘に送られたほか、スキーをはじめ各種の行事にも参加していた。

子供は、修学旅行や林間学校での利用が多いことが来訪者の記録から判る。また、動物園や遊戯場等の設備が子供向けとされているので、相応数の来場はあったと思われるが、その他の言及は極めて少ない。また、家族連れは、貸別荘の利用者として挙げられることはあるものの、記述の割合からは広報の主対象とは考えにくいのである。

花巻では、宝塚に似たモダンな設備とイメージを整えて、先進的な都市生活を同様に伝えていた。しかし、清新さだけを先鋭化せず、施設としての役割や経営では地方の実情に合わせ、当時の娯楽全般が凝縮された空間となっていた。時代の反映という意味では、宝塚を超えた場所であったのかもしれない。

周縁の環境から見る歴史

こうして見ると、宝塚のモデルは、イメージや形式として他の地方で広く受け容れられつつも、理念や経営指針まで踏襲されていたわけではないことが分



花巻温泉の動物園と子供トラック（絵葉書）

花巻温泉に今も遺る松雲閣別館

かってくる。本質を踏まえず安易に模倣されたという解釈もあろうが、それぞれの場所や事情に合わせたあり方が模索されていたと見なすことも出来る。そして今回はこうした結果を受け、宝塚の先鋭性を再認識することとなった。

このように、ある時代における周縁の実情や環境の実態を悉に捉えていくと、既知の歴史や物語とはかなり違った風景が見えるものである。その時代を感じる細やかさを獲得していくためにも、有効なアプローチであると思っている。その作業は、私たちが暮らす場所や環境の原風景を掴まえ、自分たちの位置を知るための手がかりになるだろう。

大正以降、日本の都市の近代化は急速に進んだが、それは単に代表的な事例や東京の焼き直しではなく、より多様で複雑な経路があったことを認識しなければならない。行政や著名学者が表舞台で進めた近代化は資料も多く研究も多い。しかし、資料が雑で少ない一般市民の日常や地域環境にも歴史はある。これを顧みなければ片手落ちだろう。宝塚歌劇も、宝塚新温泉を含む遊園地という場所も、都市空間・社会制度・近代史など様々な意味で周縁に位置しているが、これをわざわざ研究対象にして、生産性は低くとも地道な作業を続けている理由はそんなところにある。